



案旦

名古屋
反高吉

己巳年





寛延二年
(1749)



午卦返りの早を述べて

係子の教やり永も松飾 兼雨

芹もこの形もも疑も不阿丈

麻も角成せも奈良と却に 普夕

其二

凶国や鬼も志師の古教 普夕

目もを事一を流も四つも 子礼

火起ま暖れ日る裸まで 止交

其三

昔も心も且や形のがり遠京 止交

中もち死ん入り通はあさり 双京

秋入は修徳の市田も及直りて 不二

其四

本と料とを流氣力や人のま

不二

花と見くく味太高月 普夕

版柄の町入道の名もなきて 以足

其五

僧

以足

裏白と條もく都も雲の袖

芋も親子の名を後い草 兼雨

妹川も姉川も藤もまゆめ 子礼

其六

子禮

硯もと海干や世のなけり

梅もけりもさ山れ四交連 止交

番も後りも家もつと連まきく 以足

其七

蓬萊や一の宮殿小二風も

阿文

梅がけの神忠天改 不二

縣石さいつし高り疾をて 双京

其八

双京

候ぬ乃ふりしと幸ぬ福寺

鏡のしとと解て高じ日 双京

勢勢此學し水の通じ其て 常夏

九日二京

雙中

司むは日やとと東し

雲い雲いの徳くとの福 緑之

宗わとと必斯乃の東好小 芦丈

二京

芦丈

よい中し梅し徳くねと雲

よと梅し子福世の所 野有

切茶と然と言やよと代が 雨月

むし加しととむして

雨月

ねよ及のけしとあまの月し

大よしとれと高しと梅田 其推

積雲し似し魚大と吹らして 野之

いふ

ら鬼と云ふいふをりり

野有

まのいの布の里と云ふ

楚中

雲のゆきしる 駒のつりて

其推

五

いふいふいふいふいふ

其推

外景をかきし

西月

ちとちんちんちんちん

徳之

六

園のいふいふいふいふ

緑之

破鏡をいふいふいふ

其推

あまのいふいふいふいふ

楚中

いふいふいふいふいふ

伯系

いふいふいふいふいふ

理王

執志をいふいふいふいふ

其推

七

大事乃足しつゝいふいふ

理王

らとらとらとらとらとらと

伯系

ゆきゆきゆきゆきゆき

六阿

勢と

艷山

若水や移すいふいふいふ

久要

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

勢と

其二

万葉の流ゆきせぬ声

志賀

きふと梅の馬場の赤い

志賀

向ふ方にも花をばりてあり

志賀

五三三

志賀

若水はききあはれしなり

藤一高きなり四方井

探水

万葉の山にふれしなり

南舟

山首

其末
記候

りねれ日原のしるし

浦里のありあきなり

行平のしるし

山首

浮龍寺年中

庵豆

あきのの原のしるし

浦里のしるし

志賀

あきのの原のしるし

志賀

五三三

志賀

あきのの原のしるし

あきのの原のしるし

志賀

あきのの原のしるし

志賀

五三三

志賀

あきのの原のしるし

あきのの原のしるし

志賀

あきのの原のしるし

志賀

けの舟一舟の舟の舟の舟

亀松

大馬路を背のまゝ

也雄

鳴るゝ雄はふれぬ鳴く

志雀

~~~~~

柳ゆく風白ひらく春は

志雀

新浜久保川の暮吟

志松

空を渡る鳥の顔がよも

又水

菜肯

書初乃奴の海や浪の毛

庵互

いねあふふ民を地をう

志石

お豆乃種やまきま

普東

元且

志高とねもまどの男むね

叙有

あこゝとえつ勝る大ゆ

州巴

命言うえとえとけ全新し

亀又

二重

之有

花もえとえとけの和暦

州巴

あつふくく都七都七

亀又

子日と心持し千代の都め

叙有

とみ

若のの所と来れ井車

亀又

海はくくれはくく

叙有

而たのりくくくく

志色

五ノ五

ふ〜〜〜〜〜

布海

日記〜〜〜〜〜

栝栖

車〜〜〜〜〜

珂雪

二

出書舎

珂雪

積雪〜〜〜〜〜

宝川〜〜〜〜〜

布海

乾〜〜〜〜〜

栝栖

二

風風

栝栖

あ〜〜〜〜〜

高〜〜〜〜〜

珂雪

ふ〜〜〜〜〜

布海

二

珂雪

ふ〜〜〜〜〜

陸〜〜〜〜〜

燕泉

き〜〜〜〜〜

文啓

二

燕泉

依〜〜〜〜〜

出〜〜〜〜〜

文啓

小〜〜〜〜〜

珂雪

二

文啓

初〜〜〜〜〜

西〜〜〜〜〜

阿龍

室〜〜〜〜〜

燕泉

二

二



も湯乃を比内島一と  
凡そおきくく目か定  
ま中か秀しふおと  
あし

いふゆい松く崎舞の春 李冠

け藤しめさし 富士乃山積 け蓬

あゆし年とかすのく  
け年々のまとけり

極けく花楊甲やまふのま 維烈

元旦 赤桐

若葉乃出捨りいぬ鳥留り赤 赤桐

赤倒れぬぬ家のゆきま 有耕

月名の中とまありはくく 仁尊

其二 仁尊

園れ名と春ありあり白け春

山より客の先出りゆ 為文

誰神お馬も身とたかして 赤桐

とまこ 為文

大ゆくのうほやまうらむ山

紙衣を襟とて月の時 仁尊

柳よりと春の糸小ぬくまて 有耕

とま女 有耕

新とちとゆ記や河らゆ

化粧りまふ奥の若水 赤桐

草界穴のゆやゆぬまて 為文

元旦

榎月

黒儒子乃馬一内て花の事

まづい鉢あけて見る物と松

里列

松の青と園くると人志也

巴梅

二茶

ふふふふふふふふふふふふ

素洞

梅と里のぐ里に鉢解

陸巴

柴馬と鞍馬口くまふれく

里列

三茶

水くくくあやほそく子茶

松長

仕合すぐらまてし物

榎月

夏兼く門田の路も田とすて

陸巴

四茶

陸巴

くひありの家の松茶や門とり

水くまきの海内鉢梅

巴梅

ふ美の翁小素名のみまきく

榎月

五茶

巴梅

黒圓や治仕乃姥と小笠原

小貝と口と竹くあふゆ

松長

大黒乃燈の丁子花

素洞

六茶

里列

一目とあふくとあふとあふ

春の松抄ととるく山の松

素洞

茶舞くくあふとあふとあふ

松長

泉且

三ノノアハシカク  
持ハケリクハノ  
又科乃林ハ  
ハカク

乃美乃種前

度竹

ハカク

乃花ヒキ

八琴

元二

菊里下連中

甲ヒ

之南

むの

本系

吾積乃

去角

厥二

去角

初

ハ

丹李

知

里系

厥三

里系

若

初

之南

七十

蓬里

厥少

蓬里

ハ

初

之南

ハ

本系

一厥五

清あふ道乃廣きも一より

末系

還序の圃と小田の芥菘

里菜

ほぐさき霞と清と菊のゆ

丹孝

一厥六

白きとより大ぬくれ清は雪

丹孝

かすめぬおもはれぬ眼を

蓬菜

七葉のふもよるもやうきと

ゆき

一厥七

羊玉と印いて山乃高き那

菜香

夏の心一高れ 正月

七旬

福引乃健くぬ中のまきて

と甫

親のま中身空に所着と  
ま〜〜云たりおと有  
とま〜〜と押あふ草根と  
文〜平〜異〜

四方観

竹の友

一厥八

大きく田毎の香の架二月月

梅豆

一厥九

赤まゆや師きの鬼とぬより連

全

終れ守る市の門く

具宮

火利心の大敵の廓とく

梅居

あつ〜〜ちかかからてり

敬守

九日

若狭戸七粒とあやも雲垂飾

里應

せいふ

衣籠つ一粒とあやも雲垂飾

全

あやも雲垂飾のせいふ

百野

此地のせいふとあやも雲垂飾

梅豆

感徳院のせいふ

あや

年始

あやも雲垂飾のせいふ

何力

せいふ

あやも雲垂飾のせいふ

全

近白(言く)あやも雲垂飾のせいふ

里應

あやも雲垂飾のせいふ

露狂

あやも雲垂飾のせいふ

百野

三始

あやも雲垂飾のせいふ

露狂

せいふ

あやも雲垂飾のせいふ

全

あやも雲垂飾のせいふ

梅豆

あやも雲垂飾のせいふ

あや

あやも雲垂飾のせいふ

あや

新日

あやも雲垂飾のせいふ

あやも雲垂飾のせいふ

百野

せむら

百部

朝霧の淵つゆさや年九浪

光陰況小流毎日 香ね

夕心ふ京よみ流れ世帯傳て 共書

おろ筋ふ栞がごとひふと 梅五

早ふと

梅若

若山つかげくアガらみふの系

せむら

今

二ふれ栞かしくや衣紀

あそ氣く後のわ中 何力

唯と下の栞よふれ入として 百部

おとたでふふは 百部

五十一のまじや

里雀り  
敬字

年よりむの栞か下栞あむ

せむら

今

朝霧のし子やえと梅く物

舞臺の栞かさささめ 梅若

ぶつふ小栞子以膳と栞よて 里志

焼と一めもさめ栞栞の系 何力

今果且

其字

月より坂うえてと栞松大路

せむら

月よりと後の系や陰夜の言 今

〇と栞の栞の八字栞 敬字

海江のまきのふかき水にたぐひて 何力

お合傘より下流のふゆ 梅岳

果旦果草

一六乃表北よき也唯此去 星麦

年浪志市よりせり汐より 全

青川や島乃よりか流るる 人吉

さし河と世酒中八飲のき水賣 全

く万より小谷川より年即川 龜毛

年北尾中よきとたふ活大根 全

雜煮より入るや神乃和布州外 南旨

年目

若水れ後より流る神のまへ 左由

新日わきと梅老と塩 似水

高野よりあまの崎より掃陰て 又蘭屋

いふ二

こ流るても福草より心若水 全

高野より流るる池の誰池 聖秋

藤のうへを流るる橋より若水 朴子

いふ三

先陰乃より流るる河初より 全

川より流るる蓬草乃門 左中

春より和田の草より流るる河 似水

そ中

角文字の蛇や海苔のねえり

似水

浪の勢いと水国乃去

朴子

凍解乃子鏡子納の産りて

野村

いし立

全

美此岸印しきあーとての糸

招きよあはよふ同の波音

蘭屋

娘乃名残ちりよむの冬うけて

左中

元旦

表軍

あもあま年の根絶や松よ赤

霧の中より町を眺め

うらみすむね言すふい嫌しそ

歳首

歳三

吉去乃いふ魚も口獲りら

つめ花よりくさの戸

糸遊よ琴車より日定し

初任心鬼と

門ね乃初編り近初盤町

鳴子と木の葉や多進

成久保一文奴尻出いて

元旦

不夫

討ひまやや争毛乃二年抜

笑初子詞の如き心算り

何有



くまのけりあはむちのまの 里朝

ほくらやあまのたのめり 杜末

相生のまじつしめしねこれ 不権な 後推

やうばりーねの飾りまのり 其石

ゆきまのゆきあまじつね 江巻

おもとえてねのふきやまのり 橋尾

大ゆきやあまのたのめり 千雀

後まきや内表のなまね乃こ 宇冬

おもとりーゆきまのゆきあまじつね 中 馬黒

舞の初舞と羊のおどり  
あまのつら

あまのつらまて 新川うぶの神 賀橋

ねんしきとあまの志れまのり 器水

清きれぬとあまのまのり 不流

下知りまのり 丁新玉飯より 初陽

あまのつらまて 二福ま中 圖之

さくらやあまのたのめり 麦都

あまのつらまて 士傲

おもと 柳蛙

あまのつらまて 辰泉

あまのつらまて 文芦

二節其一

昔の茶とやいふ一庵山竹

晴可

子あめあつつくさひの石

計吏

やふ入忠留まよとる麻の衣侍て

惟夕

やしのこ

惟夕

くくひよのむらに動くもゆきり

名さへ霞のそらも回

蝶の

七十のく年とゆめふれ控て

計吏

やしのこ

計吏

晴もくさし伊達の霧もあめの花

あきつきの傾城乃下流

惟夕

後も東も乃後ふきさて

晴の

人日書

鳥曲

昔の晴りる人よ花とを

梅の花れをや雪しそ

の柳

あきつきの海の水も砕けま

この中

昔の治まふとてあめくさ

曲

腹這うとてり夜乃論言

柳

松原と社を問ふといは

中

人日

貞士

かむくくと深くつくと地味

竹馬乃芝達もあり若菜敷

の中

平且

海十

初月新し川に千金の舟の後  
 幼きすぬ竹乃実より門飾 藤文  
 清く咲く花は初は春 李門  
 年の産し草と一なり花開 仁六  
 こととたしこと笑して初日は 大塚  
 けしとやたを侍乃山はさ 典一

早木且

藍くさの衣ふとれはるうれ 思立  
 早木也

初月と初より柳十節竹の身 全

子日記

本系

千代の名とて初より初はるうれ  
 士之は一並よきの野 石巻  
 ちよぬぬとて初はるうれ 舟子  
 清乃きいと降合とて 里子  
 ちよぬぬとて初はるうれ 達子  
 ちよぬぬとて初はるうれ 二甫  
 月の初まりのちよぬぬ 去角  
 ちよぬぬとて初はるうれ 笠子

人目

城山連中

の籠

事新し中々やせん世の長

のちても情もくぬあまふ

志のゆい摘りてあまふ

妹乃松より摘のゆいあまふ

ちもまきく備ねひくつふ切

津嶋連中

歳旦願小念五文字

秋の四九折垣あつちかきりあま

市船

國邸もなうゆくと車

貞志

やうねのふ垣の親乃風ふくして

貞志

其こ

貞志

出流やけ月毎と青む磨山

知づもきりぬ下なる居探あき

舞し人あきあきり信がくして

其こ

又せよやれさくえきくわら始

心とちり遊ふもく代

水程のゆいあまふあまふ

各回題

川ぬれふあまふと解よりり

久才乃あまふきりや解よりめ

むのこいあまふと見え深初

貞志

貞志

里九

ふれ乃無<sup>い</sup>かき<sup>の</sup>ふ<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 和川  
あ<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>せ<sup>る</sup>の<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 里木

嵐尾問題

難波の<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 市永  
世の中<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 芳志  
書<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 紀吉  
あ<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>せ<sup>る</sup>の<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 貞徳  
心<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 甚良  
龍乃<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 里九  
あ<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>せ<sup>る</sup>の<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 和川  
あ<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>せ<sup>る</sup>の<sup>り</sup>て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup> 里木

巳己歳且

津治神宮連中

蓬萊や家<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 文士

尾<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 全

永太<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 全

日三二

人心<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 楓志

都乃<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 全

新<sup>の</sup>り<sup>て</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup> 全

言好

幸ひしこころのぬれ者か

言好

おぼろげりるう後せねの子

全

あふ入る年念もらふわびけし

全

六雅

神つりもほくはなやま衣始

六雅

あふいよふは屋敷とあつた

全

流く必見と今原ふ花吹ゆ

全

よ若

さほ飛ハ麗やふあふり

よ若

あつたよふよふのよ若

全

あふいよふのよ若

全

李言

あふいよふのよ若

李言

あふいよふのよ若

和夕

あふいよふのよ若

元志

あふいよふのよ若

交柳

あふいよふのよ若

梅兜

あふいよふのよ若

山景

あふいよふのよ若

見校

あふいよふのよ若

真立

文士

あふいよふのよ若

文士

あふいよふのよ若

桐志

雪しや幸か天の成る事難  
六雅  
酒と縁しや鳥獣の類  
生言  
庭の内乃ち鳥さふゆへ年忘  
和夕  
ふゆの上の如く年用と

年用三春

春しりや縁と情しや花  
夜珍  
雪しは縁の如くや縁の海力  
梅見  
年れ縁や是れゆへ一踏  
山景  
縁ふ小縁行りや一の縁  
元志  
ゆへ年乃ち是言し一縁の名  
見枝  
家く乃ち縁もせり一縁の名  
其立  
年れ縁と是言し一縁の名  
本音

和夕浦核園有連中

和夕

九星

和京

梅しや春をあらぬ人出入  
和石  
貴物や小判のこゝろあり  
梅戸  
春しや心暖れし美乃春  
梅戸  
こゝろの如くは  
和夕

月八分春とのいふり物見  
竹遊

和夕

和夕

和夕の陰念しぬや年景  
和夕  
春風と縁しありしや茶井  
和夕  
春しや心暖れし美乃春  
和夕  
春しや心暖れし美乃春  
和夕  
春しや心暖れし美乃春  
和夕

知多の浦敷き中

取直罪言組合

其一

まじらぬつらぬと年や風呂娘 芝麦

やういふ様とまきうらやのけ 文龜

其二

お孫りこゑしお龍の火 白羽

すく掃やすことぬのまじら 其兆

其三

おふかしけおとどきまの 七條

おはらぬとては保眼と衣死 可外

罪軸

かの浦の太まこ  
はらぬとどきまの

おはらぬとては保眼と衣死 其由

追加罪末

年れ尻より打ととけりたる電 百許

名いぬを浦寺を連中

罪直罪言組合

其一

花の赤やうらやあはぬの梅鯛 芦菰

まじらぬと各一太黒の袋足



あつた

あつた。あつたの。あつた。あつた。 里夕

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 "

あつた

あつた。あつた。あつた。あつた。 柯亭

あつた

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 全

あつた

あつた。あつた。あつた。あつた。 松葉

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 衣胸

知多郡大野連中

えん

あつた。あつた。あつた。あつた。 巨扇

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 "

あつた。あつた。あつた。あつた。 "

あつた

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 井河

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 "

あつた。あつた。あつた。あつた。 "

あつた

あつたの。あつたの。あつたの。あつたの。 巨扇

かりりの市ゆき

手紙一 走心や人しむり 井阿

知多郡常滑連中

四歌目

梅の乃ちさきまつりやれん

素秋

竹の日は雨の序の連中

曾入

ねの作は清くも言のまらけ

巴人

二七三

難者ありて山は嶺のまみ

曾入

むしと今もあゝ

巴人

新よれは人し藤のむ

素秋

二七三

ほらへやねぬと所と

巴人

わりのやくあめ視き

素秋

手鞠はく神の蘭香の花

曾入

二七三

志願あり

せいの春をうゝまは柳

曾入

二七三

校の内よ梅はさく

素秋

井の池やまのいふ小づつ

巴人

二七三

陣の乃ち色しや

巴人

ふの目のまゝ

素秋

手れ能く波し好く西の海 菅入  
株といて一寸おろす力なり 舎川

歳首 知多郡久米村

年折一ぬきぬふたりの橋のり 直河

五鹿一節少所聞れ地波 全

以極うき了務人と定ぬれぬ 久米

山手言

喜ふに里(地)方(す)ち(さ)ら(し) 五河

知多郡成岩邑連中

歳且

盗砂りめいむむる言毎に 乙子

馬場く紫小川の赤初 川雀

若海と蒼のむく流きして 形井

二宗 川雀

はくは初や切き人と抱かす

碧葉まじり揚る奥の蓬葺 形井

懐しの昔むすむし若くはく 町童

ふぶ

まのりかほほまはる

野井

新乃丁忌始はる年比始

この白いと千代巻の巻

お童

美奈のちちを狂うかこり

し子

あは

お童

あはあは月島やも新く

尾瀬乃流れ中々幽水

し子

仕つけさの髪汁自れ油と深

川夜

あま

ね風の音きくふ所乃出

兼水

嘆りくう一物なると年の化

風し

あま

風し

ねくひのむのい人のまら

梅と打もまらこまら近隣

川夜

あまのうらなはるあまのうら

お童

一と色とまらまらや隆の隆

し子

年のまら

ねはまらあま

お童とあまの年の隆の隆

兼水

来ぬ入るとおお娘や年比

お童

行着てまら隆の隆あま

お童

今度寒月並連中

歳旦

連綿しなわー目初ま  
きまーとぬくちた  
花増しぬくくも  
ふれぬもほしやも  
探りて終る

律代

長し續くお出よと律代のま

重和

行列

山鳥かへや山雲のそ拂い

可佐

小女さ

年丸帯を纏ふ備や日丸さ

蛙井

温体

福うしとほしうしと入るる

木石

清入船

國訂やゆね徳の清入船

鳥友

嬌こ

とくけお結まきーらりー見

雛ね

海

海のこころにららるる花の海

お扇

少家

魚もれ中らるる川河原の

山亀

山手

年の久れ村あけの地味

蛙井

着てらるる中と知と

重和

山手迄と道小並軽と物切

山尾

口わと凡りかきり

馬友

忘りていきりともまき押し

相麻

冷つて所をうたふ物

木石

もよほすもよほす月のけ

龍好

小糸芥子の夕暮の杖

可保

濃州太田

山手

お十とむの歌

詞

お十とむの歌

お代とむの歌

虫二

お代とむの歌

徒然

山手

虫二

お十とむの歌

お代とむの歌

詞

お代とむの歌

徒然

歳旦

安野村

初とと初と鳥一門の神 榎並利 友松

早言

候指乃初やとろくへ後山 全

遠呂渡堂

早言

弟由や星の香と後梅と 音途

里くくくく初初 全

刷毛取と志加も海と霞小 全

早言

ふつ初めは思や至乃一時取 全

冬別記傳之部

歳旦

掃く

初初乃汁ゆつとて初初初

研ちと寺初日や年の中流 馬六

舞鶴の初や初日初大初先 馬六

はる初や初くく初初初初 竹考

初風や初初くく初初初初 也十

早言

掃く

初初乃初と初初初初初初

年は初や初初くく初初初初 馬六

初くく初初と初初初初初初 竹考

一初初初初初初初初初初 也十

山部

三列國府

まの清は守りぬくまの清 飛騨

人目

まの清は守りぬくまの清 今

山部

まの清は守りぬくまの清 今

山部

三列國府

まの清は守りぬくまの清 飛騨

山部

まの清は守りぬくまの清 今

三列新編

山部

飛騨

まの清は守りぬくまの清

まの清は守りぬくまの清 飛騨

まの清は守りぬくまの清 巴東

まの清は守りぬくまの清 桐野

まの清は守りぬくまの清 飛騨

山部

飛騨

まの清は守りぬくまの清

まの清は守りぬくまの清 桐野



月と秋同く暮る 高のふゆ日 巴東

保福乃守りて 遊後顔 桃羅

年内

ふのりたきやぬき 新秋は解 貝瑞

之列書

元旦

枝と梅と門と 心もあはれ 神蛙

ふたつとふたつと 山もいづれ

ほろもや入りて 心もいづれ

ゆきと雪と 高のふゆ日

何正

柏子れね人と 作りて 庭守

小松と月と ぬきとふゆ日

ふたつとふたつと 心もいづれ

元旦

大ゆきの雪と 咲か福雪川 桃月

月夜の雪と ぬきとふゆ日 橙夕

先づと後と ぬきとふゆ日 宇川

年内

ふたつとふたつと 心もいづれ 橙夕

ふたつとふたつと 心もいづれ 桃月

煤納す心後雅や物のみ  
何心  
藤もけや帯のふしの香  
持燈  
おきすはなれとて中し羊の足  
字川

之別大野連中

歳旦

望むとてまゝ山雲をたのむ  
惟月  
若くは起て 寝ふ 盃  
夏朝  
まゝ後ゆをたのむ 煤納す  
杲和

こゝろ二

傾名ふくまゝ初くや初磨  
杲和  
荷衣の袖より白く横  
惟月  
鶯公子去ら天定ぬりて  
夏朝

其三

日一日と寝むおととあや春  
風也  
除くはえ一葉獲の 盃  
惟月  
雪の初もとていが考書とて  
三枝

其四

蓬萊とふてておと白ひり  
夏朝  
心門乃美とて春  
杲和  
公代とあとの神は流りて  
惟月

七三七

那とととと改ふたのり

之校

屏風乃徳よとつまむ

庭面乃花朝に古権讀さして

七三六

正月や心の善の暖くは

竹枝

子太の巾に焼くすりぬ子

節典れねとや馬も病まかりて

之三

弦音とやうきまうらぬ

年むらさきひてさ川このま

八八度

大志とまほにれ妹りて

竹枝

空し顔返して病う年の梅

を小豆へま西よりり寶和

年乃浪打地ばや常川斗

同友と年とま

石ま乃椿やまう一年花

人丸の心執や座りまぬ

字まうとま

机をこ後かこしむ

歳旦氷 風来寺連中

ふりくすくす行はるる

巴里

とと年の白いと海のお哉

芭江

木乃本は美も幾とあけて

桐雨

其二消

高きついでおまとのうらま

桐雨

ふりくくく梅の結い

白糸

おひの秋の秋の秋の秋

一朝

其三消

浪のよめおまのり

一朝

あはれもつらきと秋

何虹

あつりよはれりのあつり

芭江

其四消

手あはれはよととと

琴口

男山えんくろちのうら

桐雨

社合あまのうら

孟尾

其五消

ほららるる石やつら

孟尾

らめあひととと

巴里

春のあつりあつり

白糸

其六消

管むせや飾やねの二と

白絲

海山くくく

孟尾

片言の結うらとと

何虹

七七祭

何缸

刺さるやお松のおとと年買

梅咲極くかお甲の顔一翹

と柙の多しの信おあそ 巴笠

巴笠

候つふやまほの印出遠遠遠

まきまきのの鳥ふらふら 玉冠

昔の鳥の鳴き声

年小進心河と終さま玉冠 白京

おのちの鳥の鳴き声  
うらやまのこころを  
おのちの鳥の鳴き声

昔の鳥の鳴き声 巴笠

くさくさるさるのふらふら 一翹

人日八百巻

何缸

おのちの鳥の鳴き声

おのちの鳥の鳴き声 巴笠

梅咲もあまのさくら下りし 柳煙

まぶらふらふら鳥ふらふら 一翹

玉王がこころの顔と道道 琴の

何ちの鳥の鳴き声 柳雨

松陰乃りり鳥のまの松 白糸

何ちの鳥の鳴き声 玉冠

信長公伝

年四

道は修し遠くもなげ  
福徳し人の世と自覚し  
おまじの心を正し

年一の心は正し  
八木乃中体 信長

世の心は正し  
相違せぬ  
心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し  
心を正し

信長公伝

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

信長公伝

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

信長公伝

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

心を正し  
心を正し

山歌音

君が代やいふ里も初め傳の音 如夢

凡十二のうらむとまて入りの  
海へ傳へた信を例の  
西の言へりては  
る五像

凡や乃れおん先より西乃海 拙呈

花よりゆりの千の先先や 琴和

信州沼田八幡連中

山歌音

多家一人の角や 知計

松陰どのんどのや日けり 鬼角

大砂より傳へたるふりむ乃友 可席

年尾

藤伸とらるる春と盛一童 今



信州林村連中

山歌音

達家れや初めせりてねや 文夢

海をよみ美のつらむ名れ初 圭色

大黒乃つらむ名れ初 梅色

初やや初めと初め後 層巴

ほららの長とつらむ脚ゆき 友之

奥紫一むねとつらむ早 浦雲

信列松中連中

第廿

松永

列松

年此坂新しき也や如し殿

冬

葉かこふとわが新しき也

東洞

春さきし戸外をくさる如

新田

葉桐

第廿

ゆきふりてはくちと  
おとふ心あり

鉄橋の若くはやむのきをり

列松

併橋乃きとらへやきり坂

葉桐

七瓶乃一が小安用と  
おとふ心あり

素もて素は友も現ぬ所を

東洞

追加 第廿

岸より山を住しやねきり

大山

可移

藤くそとけいふ果酒や高井

左

多渡奉納

勢列素名

河津北より山勢ありゆき

余文

第廿

まじき言の彼ら紅くは居獲所

左



年旦 武州の景況

おまじとくつとわも乃勢 榊元

若水やまや富代乃ゆえ 魁社

裏のれ二条くし出工のそ 魁陵

四景言

人のあま乃厄あしと

よのう方のりよと おのくち

吹山もく果や海を二八掛 抄元

前年よか市中といきくま 魁社

ほし流し一ねゆちう宝取 魁陵

信州仁科御

景旦

春の門やと釣と三月の橋の名 八景

昔も春もさしやれの門跡 魁社

昔は春も信州の春も是あり 賢校

ほし流し一ねゆちう宝取 奏士

四景言

本年と師毛の正西ありは今ふ  
市の有るふとてゆい或は  
しれ船乗るはしれ船つきの  
舟もよるひあつらふも  
しつらふ二つも魁社のをふ  
賣化しつらふ人し流しの  
とくあはれ

人さうり昔もさしやれの市 八景

早稲田

お月さまがへり高るる月の  
うらみり白蛇のふ例して早稲  
入一まと御も(ま)まきや  
はちのちのづい(づい)ま  
行とあつとあつとむの物志  
くらけい(けい)ま  
あつ棒のりあつと  
早稲乃(乃)はち(はち)の力と  
あつとあつとあつとあつと  
早稲のあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

早稲乃(乃)はち(はち)の力と

うはつとあつとあつとあつと

早稲

早稲乃(乃)はち(はち)の力と

早稲

名古屋早稲田

早稲

早稲乃(乃)はち(はち)の力と

早稲乃(乃)はち(はち)の力と

早稲

人のあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

早稲乃(乃)はち(はち)の力と

早稲

殊作也 乃以是のこゆれし 雨月

言はしき 言はしき 言はしき 保之

言はしき 言はしき 言はしき

言はしき 言はしき 言はしき 伯業

言はしき 言はしき 言はしき 理玉

言はしき 言はしき 言はしき 文声

言はしき 言はしき 言はしき

言はしき 言はしき 言はしき 其推

言はしき 言はしき 言はしき 李冠

言はしき 言はしき 言はしき 采布

言はしき 言はしき 言はしき 不方

言はしき 言はしき 言はしき 何之

言はしき 言はしき 言はしき 以達

言はしき 言はしき 言はしき 叙有

言はしき 言はしき 言はしき 竹也

言はしき 言はしき 言はしき 毫又

言はしき 言はしき 言はしき 八也

言はしき 言はしき 言はしき

言はしき 言はしき 言はしき 度作

あつちのち

とて垢離の湯くす年経流る

聖有

小ねいふいふいとさるる

ふき合

旅人と城下の女とを伴して

協之

笠置の山よりゆり招きり

庄太

は風く月の日は江下舟

と推

熊野の山とてさく新井

松中

内代笠置の山とてさく新井

茶布

一昔の舟をたてしめ

海月

首尾合

歌道

まよひよまのいふも流るる

梧栖

靴中乃入りのいふも流るる

阿古

舟人のいふもいふも流るる

布海

舟中のいふもいふも流るる

阿古

舟の道はいふもいふも流るる

茶布

舟の道はいふもいふも流るる

文智

舟の道はいふもいふも流るる

舟の道はいふもいふも流るる

幸ぬ

舟の道はいふもいふも流るる

維烈

舟の道はいふもいふも流るる

杜来

舟の道はいふもいふも流るる

里向

丁介しうしきんの中よ平まらぬ 榎  
 君ふ代り年と見ぬの感もふ 移推  
 仕舞ゆらとあつらゝし女房 宇冬  
 子れいとて侍もやむかやね市 士傲  
 盛歌と二部あつらふ年み言 圖之  
 海もあつらふ白粉ののり 走那  
 帯あつらのまぶしきと帯もた 柳煙  
 ちと年や福あつらふらふまふ 前二  
 候つらふ天女袖もあつらふ 智松  
 向ふらふあつらふ奇のれあふ 年冬  
 將あつらふらふらふらふ年志 一糸の

山姥歌十首

糖あつらふらふらふらふのや 山  
 ぬらねたぬらぬらぬらぬら 久松  
 海あつらふらふらふらふらふ 信音  
 竹あつらふらふらふらふらふ 宗桐  
 松あつらふらふらふらふらふ 朴子  
 子あつらふらふらふらふらふ 中秋  
 かむらふらふらふらふらふらふ 有耕  
 かなあつらふらふらふらふらふ 丸中  
 しいわらふらふらふらふらふらふ あ文  
 ちあつらふらふらふらふらふらふ 南石

多しゆりやう年の奥とて

記帳

婦人紅や紅の紅とて

子孫

寂鳩の紅い今中七層とて

其石

標の四枚敷大思の赤紅とて

紅雲

とらつふの紅いやなとて

標向

衣

縫也とて紅い年の入とて

標向

合

袂柄乃三倍もきれとて

計度

紅

田舎めとて紅いとて

始夕

去年の紅いとて

紅雲

池の紅いとて

紅雲

牛草の紅いとて

志直

鬼の目とて

又水

羊の紅いとて

紅雲

とて

紅雲

ゆく年の紅いとて

巴梅

この紅いとて

紅雲

紅いとて

紅雲

紅いとて

紅雲

は流お側さしちやみありの

大羅刀乃修くかゝ難 かゝる

寺子屋に流とむの流はれて 以末

八つーいりもんきしりさす 末取

ふいりり 拙いはものきき也 と文

青より大いれて負くく 曹文

梅條の暗窓くけてもいり口 以足

まきぬへ傘のくーは果あ 子れ

あゝゝ流たくくも月の音也 阿文

雪の尻上とけぬ野の声 子え

山本

阿文

うーのぬか八女の子ぬか

大根より年の流きし人心 直文

流種と前てやきとさる 以標

茶お孫さすくろぬふ年の間 普ソ

おとす中も佐あし

いそおのりうたれき

いそおのりうたれき

年流やゝとと新の揖花 他書

布ぬ垂れあよりゆり分合はる 有耕

梅うきりーととるよやま志 左中

わーの坂成くし流子の車年 あ文

おとす山音車や大律年 音記

帰記くもを去りてやうの白 朴子  
をさうる若さうのしんがは 智秋

兼里下連中

手れ白也子乃思を有ふ松實 玄舟  
記されく崎一山松平ゆのみ 笠若  
あしむくまの終り思に同像 蓬生  
まう飛は合はいつく終の葉 丹子  
大ま乃終りや腸とまう終 之申  
あうけお娘おは流の結を去 里安

けさふとらぬわね

帯分や月よりゆり乃思の言 右之  
成るまうまを著るや候迄 末糸

追加下連中 改む下連中

あしむくまの白いとあう 文中  
何れ終の意や初終福夢州 稲北  
書初や宝を思と伊勢使 末中  
帯ふゆとや一毛の代の後候 竹志  
初もや屏風乃思まうわたり 龍十  
まの意や書ぬぬと伸お思袖 末文  
今も屏乃思もこらむく初と 友雀  
あふけと初世もき所目の始 止泉

四知下連中

拾ひ也すまもたのや除世の海 文中

古事記 四知下連中



早稲言方信一断

善なる此際やねの年用之

稀水

候のころを後よお記

白光

多難取きしな公卿の巻しりて

赤中

むしとまじりて今ぬ余ふ

麦都

所ふしきと候る声の月

止泉

鳴るりて後と候る言と

竹志

却荒寸麻も氣が落しむて

赤文

柳一何と云ふは兼ぬ

友雀

吹あけく二書おれ能きか

雁十

梅<sup>ツバキ</sup>ぬの内と只おひき

卦

おくれお方とひりり持るり

兔

杉<sup>ツギ</sup>のしほふお結かけあり

由

月<sup>ツキ</sup>ねも言れ美らとわひ

都

長<sup>チカ</sup>題<sup>チ</sup>目<sup>メ</sup>と云ふ十輪坊

泉

牡丹<sup>タン</sup>候も言と候と云ふ

志

口<sup>クチ</sup>むら<sup>ムラ</sup>すてててぬ

文

横<sup>ヨコ</sup>志<sup>シ</sup>の候<sup>コト</sup>乃<sup>ノ</sup>白<sup>シロ</sup>い<sup>イ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>と

雀

却<sup>シカ</sup>の<sup>ノ</sup>赤<sup>アカ</sup>の<sup>ノ</sup>厨<sup>ク</sup>子<sup>シ</sup>も小<sup>コ</sup>乃<sup>ノ</sup>も

十

早稲と加 けりる可

若<sup>ニギハヤヒ</sup>水<sup>ミ</sup>や<sup>ヤ</sup>佐<sup>サ</sup>柳<sup>ヤナギ</sup>も<sup>モ</sup>や<sup>ヤ</sup>い<sup>イ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>と

枝ト

福<sup>フク</sup>り<sup>リ</sup>も<sup>モ</sup>す<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>出<sup>デ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>梅<sup>ウメ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>

五雀

山<sup>ヤマ</sup>末<sup>ノエ</sup>

肘<sup>ヒジ</sup>張<sup>テ</sup>て<sup>テ</sup>や<sup>ヤ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>越<sup>コ</sup>り<sup>リ</sup>も<sup>モ</sup>丸<sup>マル</sup>灘<sup>ナ</sup>

全

人日追加立言

白紙

二母ははみかく ぎんぎん

おのむかひのり ぎんぎん

かのわのるし 松久えんげん 白紙

一筆のりかゝる 白紙 八紙

まぶしの紙のり ちのりのみ 白紙

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 巴竹

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 校書

せうり

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 竹節

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 白紙

まじり 濃紙八三

其十

あまのり ちのりのみ ちのりのみ

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 麦伍

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 文梁

まじり

文梁

あまのり ちのりのみ ちのりのみ

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 伯夜

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 麦伍

まじり

麦伍

あまのり ちのりのみ ちのりのみ

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 其十

あまのり ちのりのみ ちのりのみ 伯夜

其四

若水と雲がらひしるまき

仙夜

玉の如きとかがる海糸

文梁

若水と雲がらひしるまき

五位

月次連中

経号行

法生をさか入やうと念佛

本覚

師老の月小笠原の法生

本春

若水と雲がらひしるまき

白片

とこでうけりていふ

里老

琴那もきまておのふ

不二

やういふうらふ

敬字

やういふうらふ

梅豆

寸舌又魔のうらふ

巴梅

下站の入者も今年と新

何方

煎う際と寺の行燈

梅月

道場と仙の如く

子れ

難何て門が横屋

直文

田の行の如く

手書

新地もめと家いふ

宗潤

市とてはものたれを構うき  
 相人思ふ事には言あんぢり  
 衣の中かゝりて月  
 海ふ礁ときく酒の味  
 ことごとく連れども  
 花こゝとて家の一お  
 山々のあふれとて  
 泣きとては人の心  
 清多しきとては  
 四月の雨のき

仙水  
 朴子  
 増秋  
 白由  
 芳軒  
 素桐  
 善夕  
 梅丘  
 以末  
 百新



京二條寺西陽台板

